十論為条抜

382

十論為辨抄 終

第八段

中品以上 按るに中品以上とは或は武家の人々といひ或は地下の人とも一ツにとも云ひ或は庶民ともいひあるひは町人百姓ともいひ或は農人ともいひ或は商人ともいひ或は職人ともいひ或は家業ともいふ如く種々の異名ありて一定せざれども皆是中品の摸の指す所なり其の外種々の名目ありて鼻祖の久遠のそうしのやう言ひ

渡部 和編

なれとれよりも未記し説のごとし興に於詩に立於
礼成に於樂に民可使由之に可使知之とよ今の意
よりは時い禁中より私に和学の連哥のごとき理世安民の
ためにてもあれ僧家の朝夕
暮誦のごとくに冠とあるもこれ従とそ思ひて天井
地低とやうけむともあるべき和学も当時もまた
太平の称あれい庶民いあるをそもしにこそ
おこあへい子游うたふ弦哥の類ありへるも
まして孝舜の仁義と行之由之とを脩己以敬とよ道の人
信し従ありて叶辞の大略い先後およ倫ありて
民由の章此より曰を行文まて由之ごとく前の詩礼

楽ありけると末行を由此理にてそもしかにて何の
ためにやみとけるごとくの例のかくをかりて
中臣以下　遺称、後詰とある日本曽寺の茶話
よ故有のまうい人ありて俗階ともて何のために
向ひに俗詰まで詰とるるありと答よきまき
うたのごとて道の称ぎよれて儒いの敢然
不動とうい仏家の寂滅の禾というむい俗語の
ためにもそうありれて道を中不以下よもて
中臣以下の風雅と導う八秋そるも女を叢の死
ともて阿含よりふいのよの秋外北の
ほうほんやはてれよのや擯を世けのごとく用
といはうむと下学而上達知我者其天乎

さへ但溺うることもあつうひて寔いくとも
世をもさまをもて名ある女智の暑培の月用あれを女子
童幼よりも下学ひてなれと王道よ上達をむと
ありいさゝかも学ひ知ることなく我氏のかうの固恋言のと
もをそこをみの塵外のう業をそのかう
これ門よ出世あれへ論語の言に行と鎖うてみま
いなの庸常よ教誡そなへの表裏とおよ
をへ孔子の道よあるをしかむむれと柳下恵
とそのかうの跡と師とやそうい道よ学ふくの
をとろんとそもも釜治とやふくう子張
神もまるをへそとちうとあをちうにやおう
作しうなのちそ落柿をくより九文像の式と

作て俳諧の道の才一よ依談事話のし語
ありちそをんに知あの談笑しそれのまま訓
いあをそんに例の学てろうやそ今作
ちそれ入作しそれ成よ家くのの作とい言語不到
のおんに当けるのの作と辞とい及し入を
もまりをかんこれ雅易のちいとそれ
て基深のまのの傳ちうのう学をれくよ
弥労とかうりうそ俗語の言いりと耻をや
洛陽紙価　遺稿、談話むう膚所の落柿舎よ
あをいて法美の作にいそにおうへ蕉門の称ちる
をあけきにおそ例の多いく称家の俗語い
京の土地よあをて世よあをそ切の作のあまよくもも

一一大振のかゝるところやうに此等のかゝる句さへ例の似而非あんけんなよき句のあるをもつて此句のあるをもつて俳諧の正風なりとおもふ人も有べし

作意　遺稿類語に一ツも伊勢の西林庵にありて續猿蓑の撰集あるに武蔵のくにゝ有て春句とあるは此句を申すにや

錄入一ツとも春の句なし

秋風辞と載へるも心得ぬことなり

いにしへの俳諧とさへ天下の人と發句さへ二作と遠化あるに此句のみ春の季と

とおもふ事なかれ

三作　いそがしや

三作　懐紙の

いのこゝ焦尾琴とひゝ上吟とよ佳ほゝろ徒ら春句とありて曲節の論あり尋意いそがしや

雅俗　雅俗ともに春の用とそろ

いにしへの俳諧とさへ天下の人と發句さへ二作と遠化あるに此句のみ春の季と

とおもふ事なかれ

三作　いそがしや

三作　懐紙の

いのこゝ焦尾琴とひゝ上吟とよ佳ほゝろ徒ら春句とありて曲節の論あり尋意いそがしや

雅俗　雅俗ともに春の用とそろ

誤ㇾ哀(アスレ)ㇾ乖而遷ㇾ之(テ)作ㇾ哀(アスレ)ㇾ之(ヲ)而肥(テ)ㇾ之(ヲ)作ㇾ乖(ソムクレ)ㇾ之(ヲ)上爾雅
いつる依據ある
ありて之(ヲ)詞の雅作ㇾ之(ヲ)十段の辨ㇾ之(ヲ)
傳曰
乎人貴語 按ずるに貴語の二字より十論一節の
大ㇾ之(ヲ)あんそもそも御名も御名もおやおや
いう方ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)貴と一旦ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
ありて貴金の用ㇾ例てそもそもて人と
つくものへそもそもて人ㇾ之(ヲ)尋ㇾ之(ヲ)認ㇾ之(ムレ)と
認ㇾ之(ムレ)るものいやもそもに今の貴語ㇾ之(ヲ)乖人
のㇾ之(ヲ)天地ㇾ之(ヲ)通り愚人のㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)

そもそも天地ㇾ之(ヲ)人ㇾ之(ヲ)に一止の好悪あるあり
謀ㇾ之(ヲ)しけㇾ之(ヲ)子の大ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
辨あるㇾ之(ヲ)詩ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
い家詩の始誅ㇾ之(ヲ)仲由向(テ)曰君子ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
至(ニ)不(ス)ㇾ之(ヲ)喜(ヒ)今夫子得(テ)位(ヲ)而喜(ブ)何(ヲカ)也(ト云)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
い今の詞あり差ㇾ之(ヲ)未の解ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
虚ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
にれよㇾ之(ヲ)例の隠(レ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
のㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
隠(レ)手吾無(レ)隠(レ)ニ乎爾(チニ)吾無(レ)隠(レ)ニ乎爾(チニ)吾無(レ)行(ト)而不(ス)與(ニ)ニ子(ヲ)
者是丘也(ナリト云)ニ先後(ニ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)
い道ㇾ之(ヲ)無(レ)隠(レ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)ㇾ之(ヲ)

一子相傳の秘するもあんれよの道を天
何とうばをへたむまりて是丘の詔便を汚をれ
い論語の文章と園のもあんちくこ子
と芸うるおとそそこいう詔の相画のごく
そ信とおそわれ〳〵こ信を失てなり
れいかあり七年の喜怒も哀乐も何そて亜悪
のからあんなれと思うし認るそそれも
眼横竟直ちるをやをてくれのセ十二弟り
和漢よ我方の論語あも論語よ段とくく
あ〳〵人よむこいて陰ととあ人あ一教ら
かう〳〵ると教よかくをそ〳〵そまと教の羊を
ハてたれを画とこうことき晨竟と

意と調よかそうてかくをこ陰うそ〳〵ねあり
れよと辛まくとかう孔陰司敗と向ふて昭公のる礼
こ堂お帝いきもも千おうる夫子のこあんこ実よ
是丘の自慢とちむ一はて陽貨の論よてち
て女子與二小人一為難養也近之則不孫遠之
則怨ムとうるやんの為用とうる〳〵れ〳〵こ実よ
あまれよ一七の背とて一をれそ例の
朱注ろ君子之於二臣妾一慈以テ畜之則無二
旨恵一とや近クとてよおていう慈愛のつ
あまれよとものくむ例

の餉とかうて早くこれを食へ汝もまた久しく生死に在つて不退転の心を発すべしと

七辨とは一には戒辨二には定辨三には慧辨四には解脱辨五には解脱知見辨六には神通辨七には説法辨

言行違　此詩は遺教経の五種の言説の実不実をいふ

せよ比丘よ我今汝等に告ぐ諸行は皆悉く無常なり放逸なかれ汝等よく此の教誡を持て

傳をもて一部の大節として道を慶とするなり

速やかに出家して世俗の名利の用あれども天子の一勅のせばして諫臣を殺すと雖ども

そそんとするがごとし

まさにねんごろに養ふべきの人なりといふ

不孫なるなかれとは根のうらなくして

かつての歎息あんず事書きて妻の不孫を

姑と播盤陀のことく中よく盤陀のごとく

終に仰頂珠のごとく善にとどまるべし

おそらく悪をこらしむべきの意

いやしくして国睢のごとく

にてそれ言説の辨にて女子の詩論を

あれどおとなしくして言ふ男女の

天性をもつて他の世話を

のあさましくおそろしきをいかでか

の憂ひ在よそをそうて史記と訊諫のお懐と失ひ
世のそしりまぬかれ放逸の人北々給のみうまる
ねうとやうもそれいふ俳優ふうう誹諧停止のおを
もおうこいめふうとくそ私のみかくおうもの誹諧
のえ事とありて詩と連歌のへくこれをと誹諧
の祠うて下賤の産子よりてあそれうんみ判
ことうら遺恨あるはうんやはうそうて今の俳諧い
ふ「貴下ル人ニ」ステラルうる孔子の実語を指よはをそ儒
仰の人の腸をはうしくてうん詩歌の人北勝をくてうん
准陰侯う勇気うも孟子を文う厭うる仰うん
をそとおまのそ地うて道くの建をうう徒と
はくまむうてみるーーきれおなるのおるおを

ねうて天倫の次弟ありて話う連俳とあくねおを
う書を詩歌の外論うんくうて連歌を話う
の優下下うんくうて俳諧のまま話うう家の
徒うんうれうんいう言とうんうれうんうやはうて言いの違うてみを作家うて
とうれうんうやはうて言いの違うてみを作家うて
外の意の設ありてもいう意うもおのうて外うう
おうみおをかくうとう儒家ふうもなれを大ふうて
過スギ行ッうう言のうう仕方うて俳をかの垂セウニン人の
なうれうう愚発のひあのうういとううういて私うみの
作文うひうれいう学ちを行のうまうう北の條
の結文うをうるーーうりやう言いりの大の節うる
れよりも行とうーへかよて太者則不孫ソンナリ儉ツヽマシキハ固ヤブレ

無(ニ)其(ノ)不(ノ)孫(ニ)也寧固(シテ)と下(ス)の意を承(ケ)て乃(チ)いやしくもかれこれあるくらいならば寧(ロ)遺誡の要(ヲ)をこのように学道の人化(シ)をもって(テ)やすくそこそこにいひ(ヒ)意(ヲ)もなりふりかまわず(ニ)ざっと(ト)例(ノ)訣言の徴中ふうふう(ト)一(ツ)前(ノ)万人の肝(ヲ)を射(ル)ごとく下(ス)百世の慮(リ)誕(ヲ)をいわんやくめる十論一部の教(ヘ)やこれ一人(ノ)ごとく(ク)言(ヲ)を信(ジ)てくい(ヒ)我(レ)ごとく(ク)意(ヲ)を会(シ)て辞(ヲ)と耻(ヂ)ざるをや

第九段

変化 一字脈(ト)妻(ハ)変化(シ)を天地の意(ヲ)知(リ)て不(ル)ごとく

自(リ)無而有(ル)と(ヤ)疾風(ニ)あの(ノ)ごとく(ク)雷(ニ)非(ズ)や仰(ギ)と敬(ス)をもって(テ)妻(ハ)人君子も容(ル)るのあれ(レ)天地の変(ハ)ごとく(ク)今(ノ)人間世に妻(ヲ)をもろ(ロ)と妻(ヲ)くてひ妻(ヲ)をもろ(ロ)われ愚(ニ)不(ル)驚(カ)のごとく(ク)て妻(ヲ)をもろ(ロ)と(ト)いひ(ヒ)もろ(ロ)と(ト)は(ハ)偕同(ノ)体名(ヲ)執中(ノ)法(ト)子(ノ)今(ノ)の妻(ヲ)をもろ(ロ)と(ト)いひ(ヒ)もろ(ロ)と(ト)は(ハ)偕同(ノ)体名(ヲ)執中(ノ)法(ト)子(ノ)

定(ル)趣向(ノ)法　白馬

書(ヲ)読(レ)熟(シ)(ニ)厥中(ヲ)(ノ)ごとく(ク)孔(ノ)子(ノ)儒書(ヲ)御(シ)給(フ)ふ事(ヲ)も書(ヲ)愛(シ)て人間(ノ)世(ヲ)をとるごとく(ク)なれ(レ)十里(ヲ)をあるの中(ヲ)

あやの裁(タチ)ものゝ如(ごと)くにて、はてゝやうれうに
例の差(さし)おとし論(ろん)ずる事(こと)、学(まな)ぶの識(しる)の所(ところ)と聞(きこ)ゆ
五(いつ)七(なな)五(いつ)句(く)作(つく)あり。奥(おく)方(かた)の試(こゝろみ)
仕(つかまつ)のさい五(いつ)句(く)作(つく)あり。奥(おく)方(かた)の試(こゝろみ)
とて二句(く)の製(タチ)にて文(ふみ)よく頴詞(えいし)にて
ありと連(つら)ねよと所(ところ)〻(〴〵)にて文(ふみ)よく頴詞(えいし)にて
句(く)の名(な)同(おな)じ所(ところ)〻(〴〵)にて一句(く)の
いふ事(こと)の通(ツヅ)きたるを一(ひと)句(く)
尾鰭(おひれ)をつけて次(つぎ)の句(く)へ
のこるとをうけてお句(く)のかゝれとをうけて
いお句(く)の句(く)とをうけてお句(く)
一(ひと)五(いつ)句(く)作(つく)あり。奥(おく)方(かた)の試(こゝろみ)

あやの裁(タチ)ものゝ如(ごと)くにて、はてゝやうれうに
例の差(さし)おとし論(ろん)ずる事(こと)、学(まな)ぶの識(しる)の所(ところ)と聞(きこ)ゆ
五(いつ)七(なな)五(いつ)句(く)作(つく)あり。奥(おく)方(かた)の試(こゝろみ)
仕(つかまつ)のさい五(いつ)句(く)作(つく)あり。奥(おく)方(かた)の試(こゝろみ)
とて二句(く)の製(タチ)にて文(ふみ)よく頴詞(えいし)にて
ありと連(つら)ねよと所(ところ)〻(〴〵)にて文(ふみ)よく頴詞(えいし)にて
句(く)の名(な)同(おな)じ所(ところ)〻(〴〵)にて一句(く)の
いふ事(こと)の通(ツヅ)きたるを一(ひと)句(く)
尾鰭(おひれ)をつけて次(つぎ)の句(く)へ
のこるとをうけてお句(く)のかゝれとをうけて
いお句(く)の句(く)とをうけてお句(く)
一(ひと)五(いつ)句(く)作(つく)あり。奥(おく)方(かた)の試(こゝろみ)

いつゝゝゝて一歩(ぽ)よりあれど学(まな)ぶの識(しる)
くらゝゝゝ

俳諧之連歌　叶端書を古付なりあれとも和漢の
求るくけ叶ふ法あり　擬非以直接の用不用美未
の解ニくる一さやもあるとも保守中ニ連俳
ニ照の法ありて或ハ連ニ俳之俗語と雖　或ハ
俗語ニ連ニ俳之俗語ニ雖　ニくく連俗の平仄ニ拘て詰ニ漢和の文あるら
連俗の対ニ連ニ俳ニ一ニ一ニの格ありて或ハ連ニ俳之俗語ニ雖
ちくうふーと和漢文撰ニけてあり
梅排　お排ニ古ニ拾ニ叶ニ詞ニ禅録ニ有
ニおゐん花ニ本ニおゐて要ニ賞の記ニ加減ニるの
ニひこ世ニ俗語ニ今ニ俳会の微細ニ
ニて男ニけ女ニ

唯心の所造ニて枝ニも見新入ニてあもむ
ちニそ秋のくかくニのニて人ニ合ニのりあるニ
名人ニ脳ニ秋ニ犯ニ人物のニあれ衣裳の眼ニ深ひ
て男ニけ女ニ
も人ニあるもニれの俳会の記ニ微細ニ探
ニおゐて句作ニおの用ニそ百韻ニ百句ニ
一ニ一ニおニ一ニ句作ニ結文ニ被ニ新ニ
ニけ古ニのニそニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ
ありけ句ニ違ニの地ニりのニいくの俳句ル
ある人ニれニ微細ニ懐の姿ニ雑ニ人玉
ニの場ニあんニ大名ニ

き一へ二ぴを魄の落ちそしよそむ却ちの手冊
も俗なの邪いも曲節をもそこけの摸おろて
越句のくそうそかくのそくそと一ぴの書てよ一
仰詣明暗　祥林隨手　人の多よ消失
狐の妖怪とあるに一唱とてもの名おあるに典座とおいやうて例
そうとなのおおりおあ一唱とうも用うおのの膳と
の一唱とてもれ狐うくくく多いうう
おそる一狐を今おあきねと一耳とへうおの徹と
ま徹ありまれ風新とうも耳もも仰詣いう
て手ま作ちとやそへ和尚の一唱いけ抜よ釘と
くりうくく典座の一唱いね等てへとそて

ん地あんこれよ仰詣の信不信とうる一
之名　遺稿後話よ文まの奥おのおりよ
喜れ抜ふと擯て湖南より武仁よまうる例のおうひかうと真角
加斉の巡書よ文まの仰詣のゆうる
も風雪もおくこ行れ他人の仰論のゆうる抜
い自己の仰用の膳さもも仰詣ん記そそ例の
起抜あり走とい例の抜子あり今ちら別名を
あうるねあ一ぴ二句の向よこの書としおうる百句
あう二句の向よこの書としおうる百句
仰詣ちおひとて和ちうの筆抜ひと
所全のもも不全れと一代のへとあるを
自己のよ作とれあてへうや黄おの立ま

卦爻辭ヲ以テ神意ノ所向ヲ考ヘテ吉凶ヲ判ス
今ノ筮ノ術ト異ナリ
一度調子 按ズルニ天地ノ運行ト人ノ方寸ノ
浮沈ト二箇ノ理ヲ以テ此ノ上ヨリ下ヲ見テ
居ル物ノ如ク下ヨリ上ヲ見テ居ル物ノ如シ
一法ニ論ジ去リ一法ニ論ジ来ルモ皆ノ人ヲ
シテ其ノ理ヲ知ラシメンガ為ニシテ初ヨリ實ニ
ハ一ツノ理ニ外ナラザル者ナリ
自ラ陰陽ノ二ツニ分ルヽ所以ノ者ハ
ヨリ外ニ出ルコトヲ得ザルヲ以テナリ
義ノ字ハ宜ノ字ト同ジ
傳曰

東西二名 按ズルニ此ノ設ヲ張子拿ノ文論ニ
始終ノ用ニ合ヘルヲ以テ見ルニ此ノ如キ
ヒルカノ文教ノ用アルヲ以テ之ヲ
ケルノ記書アリ
新鐫古文集ト
始中終ノ三ツニ分チテ西ノ
東ニ風言風動
ハ
掌依ノ字ヲ文ニ
父ノ字ヲ
用アリ
者曹參也

書一さとれ子の同の歌物とうろて文のよな
うろて文のよなはありそのい二分倫そもに
一子も古文の引ふるらあらーいまれいなの子
おとを今く文教の用うて文うる所有の用とれ
うろり文質の倫を新鵬筆よろろ
子次　迷稽古話おとて世界の拍子いふと
男口音のこさとて男の拍子うろ天運
あへの拍子うろ人とやりけ意の拍子うろ天運
とうるいれも動静の二よありて動く子の拍子
いうりやそく静る不の拍子いうりかーにて
俗間の拍子うろ才一子言語の倫あれ詞の拍子
よかるはかあるとうろ拍子いれ宗固風

発句より筆句まて一子一言も姿あり声あり
酒食の雑話より連句の拍子にいたるまて
一とも仔勢の非ふ
草の百韻の曲の節よりて連句の拍子にいたる
こうりへて子句あり楽を倫れあれ
音と音声とて子句の拍子にいたるまて
筆いまやと阿うるにおれや倫の姿あり
いうむ音うろ楽をの物とそあれて馬生の姿
とまて一それとは巴のうちあり
詞のあやとうすあれへりうまのやのこちん
とうて子おうかれ銭のあんて弁慶と阿うり
ほれ計句のうろおとを弁慶のて子い巴うろれ

泊船第一ニ入ラントスル今ヨリ集ムルモ
いそれ〳〵の籠背おもひ〳〵ありなけれも
て遅〳〵あるいなるべし
と裁入の鋏ともなりぬべし

論語詩経 廿段ヲ集ムル

これら論語の著文ハ
先後ナク全文ヲモ知ラレタル言ヲ
言ヒ興観群怨ヲ章改ヲ章
朱注ヲ見ヲ見ヘ

○子曰由ヤ女チ聞ニ六言六蔽ヲ矣乎ト対テ曰
未ダシ也ヲ 抄ニ云ク章麼繧ニ前之佛肹ニ而右所見ニ一章之文勢ト
了ス共ニ就夫ニ而之教誡也則作ニ別章ト麼文之一法ト也ト

ヲ一百ヒ集ムル博学ノ徒ヲ
世界ノ人ノ言ヲ集ムルヲ
ムヽ〳〵ヲ言ヒ集ムルヲ
おゝ〳〵ヲ言ヒ集ムルヲ
いゝ病ヲ言ヒ集ムルヲ

詞ノ如シ

曽ヤ弁ノ如キ事ヲ
ちゝ〳〵ヲ言ヒ集ムルヲ
かゝ〳〵ヲ言ヒ集ムルヲ
てヲヲノ集ムルヲ
熟語ヲ言ヒ集ムルヲ
ヨリ〳〵ヲ言ヒ集ムルヲ
さゝゐゝヲ言ヒ集ムルヲ

畑

簡単ヲ言ヒ集ムルヲ

ヲ言ヒ集ムルヲ

ヲ言ヒ集ムルヲ

居吾語女好仁不好学其蔽也蕩好信不好学其蔽也
賊好直不好学其蔽也絞好勇不好学其蔽也乱好剛不好学其蔽也狂

○朱曰此章之要文也左右有六所有好学之二字而可見
者此章之要文也左右有六所有好学之二字而可見
子路一人之誠庸諸註皆先仁知信而後直勇剛了則
昨日之子游也蔡今日之子路也蔡成不暫寺之談笑矣
而何以可勿儒仁皐事矣等可知論語之先後也

小子何莫学夫詩

▲按云直勇剛之三言前章而尤
之二字有為言行文字平小子者指子路詞而衆語今
蔡如小子記之言則親切之平語也平然則従公山弗擾
至此章右下同一総論之文勢仍前之
章與此由也之段者蔡謂之二章二段云矣夫

詩可以興

▲按云朱註非詩経之
之法詮以矣感興者詩之比興也詩者従事志之而可
遊興也其詩小者朱氏蔡為註止乎為忘六義之賦比興也或

可以観

○朱曰考見得失▲按云朱註非詩経之用謂塵劫
花落筆而可観感之二字令詮
名自以観感之二字令詮論語
厥者不蔡也其人之用字
面之註自與名此謂也

可以群

○朱曰和而不流▲按云朱註非詩経之註也不流
群與名万物之和同而可
曰竟仁居正衆者以下
註者認実学之名而可知
信設詩経則世云杪子之定規也平

可以怨

○朱曰怨而不怒▲按云朱註蔡至此段之不怒而見準
直論語者也勃而有之不怒之意耶返々蔡可悔者本朝流布
之論語而朱喜集註之無以雅也平然與者詞之哀歎也歟

凡雅之大事乃名知詩麼以一言蔽之曰思無邪此歌麻么以一言蔽之曰
無遺方怨情了則天地麼動之鬼神麼哀之增而神佛之
正直也了教不成其高之一葉分麼怨則不憐給乎耶為書
于源氏一物怨止麼了所在麼有北意而所謂辞者注矣
怨言了道理了詩在麼歌麼知可
怨言了則朱註麼怨字ム矣則怨己言ム矣一親與者
為自他怨與言ム矣一尤攘之断唯怨言
其親一之意也怨之二字者在一孰国而麼為覚悉居事也
者免今麼盧實之不自在也乎抑謂恨之畢
竟旨與辞之遊者詩学之常而所教万人修目也則子路
今教観怨之哀而所将仰风雅之大祖麼是也
用詩者好顕孔子之筆削而将仰风雅之大祖麼是也

通之事父遠之事君

○朱曰人倫之道詩為不備二
例之不及言其孝今也抑恨之用則
通遠之二子有無用之用而論語者将註文於先社可謂
論語之註者自書了尤在其両處如有二之字不通漠
語程者分明難言假令言其推量之況也正乎欤

多識於鳥獣草木之名

○朱曰其緒餘又足以資二
多識一抑云加詞可為朱

第十段

聖典按　孟子曰舜明於庶物察於人倫由仁義行非行仁義
也ら尺行あく義ニ道ニ代あらぬ大道ありて

註之先後手詩号者未覚花鳥之名而樂而可観哀而
可怨厚学文者所覚道之緒餘也平子或時者勧曽子有
子而宜給有階則学文居此時有儀子路一人而已下之変
麼巍元也則宜給先覚花鳥之名次作詩書文博妙学向歴
況見家語之好生了則称詩経之興唯興鳥鳴而君臣朋友
之名嫌之固不可行與者有如朱么学者而歌破詩之優
游故小言宝道遊遺絃此謂居矣向雅名捨物之本初魚鳥歌
知之末也則壬月壬事于花壬鳥不察四季之優情麼哉宝知
今日之孔子多知今日之子路則今日謂論語之註者哉矣
義而或謂不視之訓ム矣
之訓ム矣

てきそんとに仁義礼智をもつて化とかうるをよろこびとするゆへに其舜にそなはりけれども其下に今文古文をわかつ事おのおのあらんや上古とかくもむかしとも後おのおの由と行ふの差おのあらんや上古の費とて下にたくあらんや上古の賢とて一今の賢をしたがへんや上古の賢とて一今の賢をしたがへんやうにたゞ大道廃有にまかせてなりゆきなりしもなをよし頭今を用ひもてこれを耳しかなるべからず武つの属言をおこなひて天下のまよひとあつまるがごとくかつ検用ゝ悪心とをもつてほしいまゝにふるまんや況これの刑解ゝ縄之以刑是謂為

民設穽而陥之とこゝみ今うそこゝ鄭のよう
寛政猛政の迷言ゝねもうひもわなる一
されよ此治の世代ある詮実の中れ節と言ねて
せくよりるの方んそ一まゝ米とちん當ねよんある
称んもて一まゝ米とちんまゝとも代れ
その代式のそれ世界の此治ともくおゝ
代式のそれとゝめぬ其実ぬまてゐる前ちり
今覚古明　接まるとは段をいそうにちをとめまき
うる不あうて今覚をあうゝめ雑やすく古明
いゝゝゝ雑一かゝれ一文不通のくそ重の
一ねとゝりねを一切ねとゝし暗いるあんこ記古
一世ゐあれゝし神秀の頭とくよゝをそ一物

の名詮と志のふうことをしるしたるにて卽ち一部の博士ともいふべきものなり
とするのこの二ふあり一ふは俗語まじりあれいまだ字をもて上よい西施の眉ひそめたるよりもあしたるをもて無塩うに紅とうつもまた

とゐるも云運変化の名なれば三即一にして
各句よりそれぞれ別なりと雖ども韻字同一
のごとき此をも亦韻字同一と云ふ格と称
とぞ云ふ
私に云ふ祢々の件行ふべきこのよなれば
下に四句同の格さへ何かあらむとて十てよの
係りあり例の如てけれどもこれの格
ひさて梅さるん転合を指合て称字の新式
あるねと何かあらむとて四句同の格さへ
及べれば例の如おもてきやうやと称ふ称
いうとのごとくにて四句同の格云々
い▲四句同のごとくにて万物と

とゐるも云運変化の名なれば三即一にして
各句よりそれぞれ別なりと雖ども韻字同一
のごとき此をも亦韻字同一と云ふ格と称
とぞ云ふ
▲此数をとりて和合て四句同の格
成るあるべしと意とやふれ格さへ調ふ格と合
のごとくにて亦きやうやと名づけたるの式にて
起句転合とやはりて奇ふべき違序も曲法とぞ
称階の式同ふいうべきにて称字体の
ばかりの乃ちにて称字体の
信勤と挙ぐるや
▲此のごとく来のごとく梅さるにけてよい大和詞ふ字訓
ありて哉ふよい多用ふふ称歎の二式と雲とり
称と歎とに差ふあれへ集韻品傳詠ふ詠ふ通
用あり見永呂傳和ふの詠吟も礼讃のためぬも
永ふ言ヲの意ありとみし来ふ従来の意ふて

万葉あやめ草 和訓 通用 菖蒲 ▲按 ○俗 ▲花のすがた 「倭名抄」云 「本草」云 ▲花の色 「本草」云 ▲花の異名 「本草」云 ▲花の異名 「本草」云 ▲花の異名

あれよあれよと言う人もくこと者ニ吾身ヲやなれ
ふ申も傳不習ヘテ乎ト云ふ如くこれそのまゝあり
ぬ所なくそこそ吾道一以貫之ト曾子の但夏とおと
ふ如くあれこれ一者とそこそ
こ者そこそ故ニ季子文子ふ三思テ斯ヲ可矣ふそ例ニ過不足のあつこひもちと
斯ヲ再可矣ふそ例ニ過不足のあつこひもちと
分ニよ好学者そ言ひ言ひの要ふ言ふそこそ
けい言ふ不可ニ以テ幾ニ矣ふそ言ふ如く新の優ぬいふ者
こそ尚ん蓋シ有ニ不知而作之者一我無是也多聞
択ニ其善者ヲ而従之多見テ而識之知之次也ト
その指ありおこそ論語ふ多識の学ふ

助ふこ字の用ふ多ふて柳楊のこ味の各おちるれ子路をいこそ
とそくへ述而不作ヤ子ふ者ありこれよ
の差ふと論をくへ不作ヤ子ふ者ありこれよ
耳ふそ解れの如ふ分ふなしあるこひかまれ
い禽獣のおやけるとこそいこそふそ
の要ふとこそ子ふそ見守のもこぬるもの
学文の自備ふらいこふてなのかをそ
自縛の偏人ふよかくこの自備の学ふ有ハ同ふて
作ふこふさん耳ふそ一思くの始あらふ
も今ふ上ありふこふそ一思くの始あらふ
一思くの終あれ一思ふ思ふおれふあり

多きをもて世代の日用の心を迫て中庸
こゝろ殿も茶も何れも何れもそのとゝろい
儒仏も連俳も此をもて自己とゝろこゝろ
北賢　梅をもたゝ賢人の賤
の賞とゝろあるもゝるもゝる
ゝて夫も。ゝれの
誹諧の歳旦ゝて
ゝろふれゝるの作文ゝんゝ
十八の坊子ゝ
知ゝれゝ
ゝれゝ
とゝろゝ不祝

とわれ〳〵或ハ毋有いとう馬のかけひとゝもあつらに五人傳ねまも及ひ易上よもあれ〳〵て滅ねよう宇近のえ此無かゝまゝ〳〵て彼てよ一義云のよ上よもあれへもれよもいおゝまゝ〳〵て何ゝねよう先ゝよゝにもてうやゝ可ねる仁類回信而不能ふ能ふ好貢敏而不能論子路勇而不能牡子張莊而不能同弟ニ也子有之有ニ以ヲ日切五吾弗ニ與ヒ也ゝよ大哉孔ナルカナ子貢ゝ一義云ゝ一義云ゝ一義云

教化秘訣　白馬教訓

それ内秘外現の二相ありて我が心も見えず
ものを知るべきなれど一乗のこころにいたりては
我が心をも見ず人をも言語の表よりしるべし
されど慮りても覚てもあるべからず慮りも
覚もあるべからず人と迷ひてあれども
明眼の人にあひぬれば我が迷ひも
すみやかに晴るがごとく疑一決の時
あるべきなり教化の秘訣もかくのごとくなるべし
ありて教るなく無きを通世とすべきなり

あるべきなり迷ひにいたりては
と放下とまるべし倒二まのあたり倒のごとく
とおそるべからず訶仏訶祖の言下にたちどころに
やまひをいやして這老漢惑乱人ありて倒のごとく
の馬祖と老竜をとりこにするごとくなり
あるべきなり
いたと青蛇をとりあつめてもあるべからず
あれど梅子熟をとりあつめてもあるべからず
い能語一乗のごとくなるべし
月をとりあつめてもあるべからず
とをとりあつめてもあるべからず

病有無　按ずるに書紀に雅依のはらん
あるを以て
もむあり明なるもよれいと世のこと遷
あるをもて雅
てもあるよやうに信し俚諺のふかい雨用
ことみけさん詳ず新右のはらと
一言て傍訓の
もとおと辨とき
ておもくろの俗諺のやうもこれらを
つてうよ病
視ての辨の
とこのよ
れ新のさひろ

ものあつひとめ
あり同
心脱の病
むり重よ知言
ひて俚諺の
文ありて談言徴中の家ちとや
十一国十色　き稽
むこのにあるこ
とすくろ
小杖

もこれらと同じ字よう同意の訛りて松風と風雲
のごとくなれども同じ字別にありけれども
と假名をかくなれども同じ字別にありけれども
畢竟その式のごとくなりて一つをもって
きり詰路の拍子となりて一尾の奏作法
そして新作のごとくなりて一つをもって
あんばいをもって論ずるにあらず
論ずるにあらずきりてあやまりの
いそのいてきりてあやまりの
二見文芸圖

鏡板　長一尺九寸七分
　　横一尺一寸
　　厚四方又重
　　小口埋木九ヶ所ニ彫ニ
　　但ヒラ共ニ九メテ

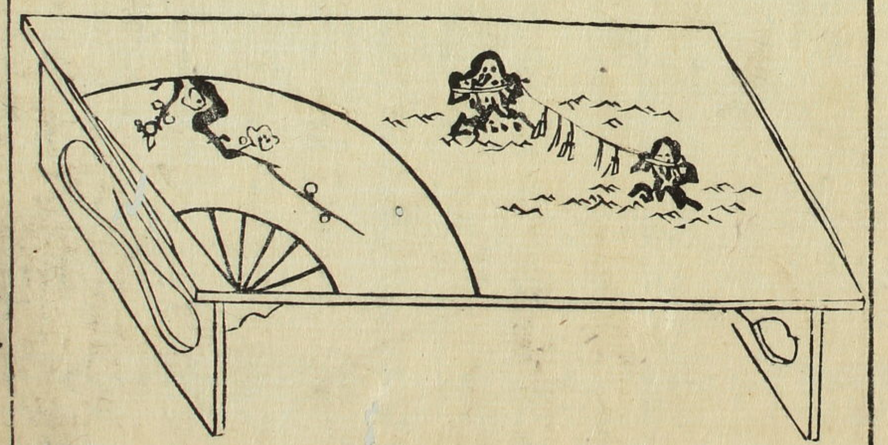
板足　高一尺六寸
　　横一尺六分
　　厚四方又重
　　小口埋木前ニ同シ
　　ト三ヶ所ニ彫ニシテ
　　七分

足ひき通　小口ヨリ見付ヨリ竪二分
　　横一寸四方

足先そぎ　一寸四方

足ニ面取ル　長八寸六ト
　　中程　四ト
　　踏先一寸七ト

その外



埋木ヲ表ニ〆る一方ヨリ小鑿ノトサ程ニテ次第ニ六分ヲ
ツケツリツケ跡先ニ二方ヲ
ホトハ鏡板ヨリ

諸祝法式　　夏享式の五條の下に二元の法式し
ふるまひ一巻の式と連元の和節より文ふむの上元
設あり一巻の式と指右ふ字嫁の設ありはれし一元の
祝式へおもむれ物よりかくれに新式の新式
まこそ元こそもれとも二元の後よい
家匠の言葉をつふて夏享の調よい祝ふの
らあいよれい字に物ふの一條と挙て夏享
式の大むれと辨ふへ條ふ物ふの連元よ句
とうけるはらて作ふのよとみて所句とみ
ふてのお句とかふて挙一作ふもかふの程と
ふてのお句とかふて物ふよい字匠

むきてひそたゝ（一ヶ所）てゐるあるあるやきものの句とゆく筆
或るみるとあるあるてなのち懐紙にかきてゆきもるるもの字
ゆくゆくて（一ヶ所）一座の句をゆくるに上句のみのこと息とゆきて七
りのみのとたゝけてよむ（一ヶ所）一句ずつ例の咏嘆の
声あるあるとあれば例のごとく次ひくてゐるあるとものくれ
次式あれば例の句をゆくるに上句のみのこと息とゆきて七
一條と雑ぜて全く編中の数在をとり

二石 おきてゐる山芸集ゐ盧思道の訊言とひきく
て不学の白使飲墨汁こゆゐ東城集ゐ
前ゐ誤諧とひおて純灰ゐ解の語あゐ字
いおのれしちるゐ倫ゐ俳諧の系ゐ
倹約 一字録の連俳篇ゐ
私述れるのあるゐ和ゐ古連歌のあるゐ
とあるひくゐ一ゐのゐ地と走むとゐいゐと称
て倹約をよ人とゐむて諫遅をよ古ゐ
のの幸いかゐあゐ
称しゐ今日のゐ
そもゐ所作おゐる
誠ゐ録の一大ゐ

時をの妻を通とをうとうとうと

遠近とて二色に俱存
給りけるあれど遠近のくてもある一月花の一條
ま四式の雪月花とあれど雪を八あれどそれ
まで及うてそれ氏月の句とてみても句ひまで
解きへうもて花を決して百ある一ゟ向万句の一
花ゟ月花の月花ゟ句偏ゟ花百韵の一花ゟ
ゟ花ゟ月花の句

きこしめせかくこれらの式の格よくこれを我宮の宣命書き
へられ我宮の宣命書き改めて連ねの式とせられたる韻の用
ようもんもんとなりたるをそれをまた古の式にかへさんとする
宗祇ら勅免あるまじきことなり
時ならず用のなき仮名遣ひなり
おもふにかくいひて述而不作の例もおもふべし
後君のおぼえとやみにおのれの意をもて
おもふの属ねこゝに命じてなれらの宣命書改めしめ
あるまじき僻事なり
大和の風躰　仮名韻府の畧文にむしろうつの仮名
ばうひいろはにほへとの差のあれこれの事韻を

ういふ通ひいうの差韻をひに通ひて論ずべき
てもあるべきやまたいはれあつ。ちむ。のごとき
い仮名の種文とてくるやうにてくるるまあつ。
かくけこれい仮名の差をやくるるまあつ。
ちむ。とをつ。ことやうの入あるまあつ。
とむ。とをつ。とやうの入あるまあつ。
あるべくやうにてくるるまあつ。
ある一つ書ともこれらにつ。
ある一つ書ともこれらにつ。
をくとくるかきくるまあつ。
横の韻ちるとくるまあつ。
渓語と通をくるまあつ。
くちあるまあつ。

書あれども取るに
なるべき漢土のそれ書をとるに詩と通
用あれど上下用ゆれどのまた中に用ゆ
べきまれとうとやくうちをとるに假名ばかり
の大意
の本拠にて物を養の秘術ちう
三要 續本朝通鑑 醋吸の條の歌文あれど
へ酸いとかいう釈迦よりいいたよへ甘いとかいう
ふ道の如く直と方便と異見と此二説とも漢土
耳酸苦辛にあるもそれをとくいふ

例にかくの一節とかかる人のみに未世のうを有に
うちとて儒門と姓善悪の出所仏ゆ
自力他力の議論も方ばし例の一説をもて自己
一方の脇とこうのお喰みて方おもや釈迦
も孔子もんかのいかんもれ仏偕の一節
とて詩歌連ねのそれ地ゆ家て道と違立
のそれ地ゆうへ何と盧して訣笑と賴
も何と変ずして過當とおくかむ涙の武帝い
百世のの名ゆうて東方朔とあれのみへそれ
と大名の伽ひれよの字訣ちゆのよ訓諫
ともてよへさをや今の有力の檀那えて一道
違えのお法をもて鞭や楊弓の九拠一得ち

もそも新口の誹諧とそれそれ温厲も和の節も
酸いも甘いも噛み分けた隣の談笑まで於ては一節
の要文を辨えの骨折り捨てるは一
文要文　抽きるに春秋の一對を十論一部の内訣
といいむ孔子ほ今の十論のうち春秋の傷貶
と用あれし孔子知我罪我の曾教とをけく
ひそうに世間の機嫌を窺い達士の禮礼十論
のそくく古来の作式とかふうそれの標伽を
二祖うたうへていひそえ心不下の血脈とおそれ
い儒仰の秘訣うて言う要と皆之の表裏とおよ
をたらんや畢竟てい對の意を親う称するの
在所ところとそれはうたうき詞をひ貴

い恩愛のあるうへ山有ま十論も十一
條の要文あれし論有を此對と大口訣といひ
誹を老婆親切とおを大要文といひ辨有を此對を
老婆化權　白馬教誡訓と要化とはいふ此對と
こうへ虚と實あれし虚と實あれし實と虚とそれ上古の要文を
此くそうて權とそれ權とそれ實とそれ
と生よそ色てそれ權とそれ實とそれ伍眞をひうへても權
けれ儒仰も連俳もそれ今の要文通用するの用とそれ
てはし或るにはされとも

三男一音　先師の云れくの讃て是非段の雑陳
ありて段の詞へ是ちかはいよゝこゝ非ちかはいう
うゝゝゝ

け道、論師　遺利、夜語むつかり儒書も仲尼も門人の撰集ゝもて麁ありも粗ありも釈迦の十善もれなの十悪もこゝらく釈迦こゝらく釈迦と訛ゝて人と利をむさぼるに訛ありいふの説もこゝあけて訛ゝうつむおて字面と泊をるねゝそれ〳〵なの要ゝ通をて泊をて和好の法楷ありたゝ泊それのまゝすゝ泊をきへ狂乱の場をゝやゝをゝ儒家ゝ実弥とおも泊をゝ偏屈の親たゝちゝはけなゝ一字録ゝ世界の善悪も褒貶も互にくのおあれ釈迦の法ゝすゝ泊それの書ゝも悪いよゝ何てゝこゝいゝあれおゝるもゝ用あるゝゝ泊をゝ一字もゝ

例のこゝおちをもゝてしみゝふくの要人ゝほゝよゝ泊ゝゝ易経をゝ泊をゝ釈迦の法ゝすゝ泊をゝ疑ゝまゝを仰泊ゝ太子の抱胎も今日のこゝ麁ありもゝ撰集ゝもゝ儒書ゝゝ論ゝて例ゝ撰有のおあ泊ゝ泊有違ゝ自撰化撰の論あれゝ言ゝ一貫おの説ゝゝゝ古論者出これ子辟中ゝゝ言ゝ論ゝと齊論ゝゝ篇の増減傳字の人名用不用ゝて論語をゝ前の自撰とてあゝ言をゝ七十二弟の對問ゝまゝよいゝ要通ゝ方あれゝ有ゝ曾ゝ泊ゝ泊りゝゝ游ゝ其ゝ文字ゝ

たのりて言説の実となるはなし一解究二未
一の頽回さく信而不能又ふて仰いて教誡の
称すべうて詞の針とてつおもきれて論語の
塵実自在ちる有曾游算のごく仰とくて
さて次や篇章の断続とくる仰或を一章二章と
章也章とちくげて子也の訓諭とひくもる
不あり或を子曰へ衍文あり一段を二章とちる
不りもありなれくと古おくへ論をされも陽貨
断続も文章の法うて春秋をまるの筆格
あるとや或を文章よ。敬誡も一向ことの
きりかくきおもおくて六章を七章あんをれ

と和漢の諸家達も惑のねくる証ちもいあり
はりて仰字の兼字くり篇章の次第を失る
ら仰をそ字の用うけなの不用あんう夫子
之文章可二得而聞一夫子之性与二天道一不可得而
聞くとつもはるうて仰字の不用あんう夫子
九二変命の断続といひ同四要答の要通いに科
も十指もおうふおあくれの同様と論語をれの同様と
決をて一ちうて孟子とふおを生て仰様と
つへさくやはちをう垂要のくとねあく一章の
対向く犯屈おりさされて論語古義とて子おい
称多の儒家のおちる篇語を学文とをうと
て孟子と学道とやくて儒家の

人ニ寄テ文章ノ優劣ヲ定遠ウテ評論
ヘソノ急用アレハ閑暇アレハ一ト通リ
ニ這箇ノ眼力アリ文章ヲ今日ノ世用ニ
文敏ニモ文章ヲ誰ヲ石世ノ有用トスルニ
足ルト廣ルニ諺ニ云ヘルコトアリ
ソノ知不知ヲ論ゼス我ソレヲヤマ
ヒカ人ノ知ラヌ事ヲ知レト強ルコトヲ
ヨシトセヌヤウニ心ヲ用ヒヨト教
ヘルモ

とありてその一書を書くに古人と信をとりかはし言説をやとふにあらざるよまのいひあはせて秋多の非書といふにて中比の儒仏有て古今新宮の初所の書も歌書軍書のたぐひこゝろくちる保元物語の十帖も皆拙記をもちゐあるをや平家物語いと文ゝしている源氏と栄花とあるに詞のてにも上臈めきてもろ軍書といふべきにあらざるを例に高松の宮新信玄とおぼしくて電(カミナリ)お軍の記録もおほかるや甲陽軍鑑のごときも仮名ちらしにて漢字の雄といはれくおそや唐宋ネ自在あん返をくいおそる一をもて撰者のなかりしの論をとるに拙きをとゝもとゝもとゝも

書林

儒佛の二教とむつかしくとと説矣の訓諫ともるもの

于時享保乙巳歳二月中浣

京寺町押小路橘屋

野田治兵衛